緯度観測所創立75周年

去る10月15日に，緯度観測所創立75周年記念式典が，水沢市市民体育文化会館において行なわれた．式典は，文部大臣（代理），学士院院長和達清夫さん，測地学審議会会長永田武さんらを始め，多数の来賓を迎え盛大に行なわれた．鏑木政岐さん，旧職員である上田穣さん，池田徹郎さんらのお元気な姿も見えた．

当所は明治32年（1899年）に“臨時緯度観測所”として発足し，木村栄技師が所長を命ぜられた．1898年ドイツで開かれた国際測地学協会総会において決議された北緯39°08′同緯度圏上での緯度変化国際共同観測がその翌年に始まり，日本における共同観測所としての当所の開所となったわけである．その後，1920年に“緯度観測所”と改称され，恒久的な観測所として再出発して現在に到っている．緯度変化観測は，眼視天頂儀（VZT）により，同じ精度で75年間休みなく続けられて来た．1955年には写真天頂筒，1964年にはアストロラーブが設置され，経緯度を同時に観測するようになった．当所には，1922年から1935年の間には国際緯度観測事業（ILS）の中央局が，1962年からは国際極運動観測事業（IPMS）の中央局が置かれている．

時計の精度が上り，写真天頂筒の観測が本格化した1956年頃からは，経度観測からも極運動が算出可能となった．又最近，人工衛星の測地的応用の精度が上り，極運動をも検出している．さらに3，4年以内には月のレーザー測距からも極運動が見出せると言われている．この様な現状は，4分の3世紀を経たVZTの連続観測の意義を問い直し，極運動研究，緯度観測所の将来をあらたに見出すべき時機を示しているようである．創立75周年に当り，“緯度観測所75周年誌”（緯度観測所編集発行）が刊行された．（佐藤弘一）

新刊紹介

日本星名辞典

野尻抱影著

（東京堂出版，B6判，260頁，¥1800）

日本星名辞典の出版を喜ぶと共に，内容の豊富さに驚ろいている．しかし，今さら星座の和名を集めて何になるか，星座は単なる空の位置を現わす区画に過ぎないものだとの御意見もあるかもしれないが，一度この書に目を移すと，そこには我々の想像もつかない父祖の観察眼に驚ろくほかない．落ちついて考えて見れば当然のことであっても，平素我々が観測の間に気付かない星座の関係や運行までも気付いている．これらの観察眼，ややもすれば西欧起源の天文学にたよりがちな我々に，これに劣らぬ日本人の天文観を教えてくれる．しかしこの日本名も，現代では80才近い人にしか求めることが出来ないのは残念である．過去においては，日本人は星座などに関心がなかった，と勝手な解釈によって見過ごされてきたのであるが，本書は見事にこれを打ち破られたものである．

本書を手にして，第一に膨大な資料にはただ驚きのほかはない．今後一部の資料が追加されることがあっても，これ以上豊富な，全国におよぶ資料が世に出ることは絶対ないと思う．天文・文学両面に精通しておられる著者が，半世紀にわたる膨大な資料から精選された約900種の星名を，利用する面からは便利なように辞典の形をとられ，内容は読物風になっているので，同じ著者による戦前から出版されてきた「日本の星」第三集と言った感じで，第二集より星名も約200種程多くなっている．しかし辞典として出版されたために，他の著書のような楽しい味わいは少ないかもしれない．簡潔にまとめられた星座和名集といった感じである．我が国から見える星座数から考えると，集録されている星座数は22星座で星座数としては少ないかもしれないが，反面「プレアデス」を例にとると約30種もの呼び名を読むことが出来る．プレアデスの星の数も，6つと見た名前，7つと見たもの，9つ（9つ時を誤ったものもあるが）といろいろの見方があるようである．この「プレアデス」の中でも「ゴジャゴジャボシ」の名前は見たままの姿をよくとらえた星名である．最近小学校で星座が教えにくい，の声をきくが，「ゴジャゴジャボシ」などはもっとも理解しやすい名前ではなかろうか．意外なのはカラス座やカンムリ座，イルカ座などに星名が多く見られることである．形こそまとまってはいるが，何れも一等星はなく目立たない星座である．これは農耕の時に都合よく利用できたためであろう．カノープスの和名も多く見られる．真南の地平線すれすれにあらわれるので，特異な星として感じられたのかもしれないが，それにしても緯度の高い方では千葉県で「めらぼし」の名が出ている．昔は空も暗く見えやすかったせいもあるが，よく星をとらえているし，星名もよく集ったものである．

本書について欲を言わせていただけば，水がめ座の和